

自序

神噐之用莫大而諸軍噐兵出其右者然大銃重厚不便乎移動也是以專守城潰圍之備而行陣之際用之者予未嘗聞焉又其毒甚饒故人皆懼伏若善製噐機進退容易左右自由而戰陣施用則何陣不敗何敵不齏予夙志於是術功磋琢磨殆廢六晷食年已久而后尚勵至誠之意以冀入自得之真今記其一二又欲使後人以至誠得入其真於是標識神二字為號所以序

識神流秘記

袁野叔羽棒火箭之度



自得之真令記其一二又欲使後人以
至誠得入其真於是標誠神二字
為號所以序

誠神流秘記

遠町板羽棒火箭之夏

一板羽棒火箭製法は是向極く慶月録の云
はあり之とありしと予尋乎ままの云く
 打試自乃せりて大極鉄羽り極めは
 先師傳來のいづく厚き棒の板羽よ
 して美濃紙三四編をもりて矢乃
 切し葉紙に付て製しと云くは百回
 或は町五板羽十八町三板羽十六町より
 行かき予の工夫の製法は羽の半大
 事那り伏羽權股は用あると云くは地
 波用申す葉附も既る葉固は數遍
 巻りて葉紙附むは砂は葉研て
 木液一纏し用之鉄砂もよく葉を
 事鉄石のしり製し其の巾羽權羽
 或は四五にして附く尤清紙は下
 せし留をとり羽中にし羽はけく
 かりん張り付濃紙を二編張る
 葉附も二編張るは百回に權羽し
 尤薄く鉄羽り極め仕立むるべき
 極めありて也五十月三十月は竹羽吉
 両品とも用て葉附む一編して
 愚一二三編も取く木は極めは
 了かして葉を極め仕立十釘合は
 根の方葉を重きより板羽の釘合あり
 是向の極めは予の工夫して誠
根の方葉を重きより先師傳來のいづく

愚一二三編し取く木口根より出
りし一しある根は仕立一十釘合ハ
根の方糸宛重きより板羽子込合あり
先何の極意様と予す一試し
根の方重きより先師傳來の一分釘合
懸一其方も重き方より鉄羽子根
糸の周方三百周糸はなり根六遠所を
不行矢本輪り根中より錆出或する根
の方も錆出する一込合の節は記し
其方も根の方重きより二十周廿十周
百五五根周はより二十周百周より百根
五六重なり一長筒は今少く矢目指
し吉筒の長短を度く矢の周方葉込
も古邊ゆり根を葉口付

一葉込合事半百周筒玉走或八寸は
二十四所し行一六極鉄羽子替事半
二尺位の筒あり矢目方二百六七根周は
葉込合ムトメ又ハルトムルトユにて止る
平日の晴曇風烈天候の変を差引
す一又筒尺二尺三尺五尺四尺も至り
なる葉込筒の尺は随ふ増一三尺五
六寸も玉走ゆり筒あり葉込合ハユトユ
又ユトレメ込も也一四尺合事の筒形は
ハトヤハトソス迄より出合事半は六七所
し申く一

一五拾周筒長サ一尺八寸より二尺位の筒多
なるものし其の通れ玉走の筒なきハ葉込
合ストソケミよりストムルユ位も可し尤
町敷ハ廿三所也筒尺長尺は筒も随ふ
葉込増一一百周の記通事は一尺四五
寸の筒形ハ葉込引一遠所は不行
十寸所引一込合トル子も吉

し申く下

一五拾月筒長一尺八寸より二尺位の筒多
なるものし右の通れ玉走の筒なきは案ゆ
合ストソケミよりストムルニ伝ふ可し尤
所数、廿三所也筒尺長多し筒も随ふ
案残増へ一拾月記通るし一尺四五
寸の筒形も案残引下一遠所は不行
十寸所引下一合トル子もよく昔
天氣の早晴或雨申雪中尤もよく
何れ

一三拾月銃、五拾月筒後の玉は一尺寸
より一尺前後の筒多し一尺八寸二尺
位の玉走なきは案都合トト六伝ふ
廿所廿一所も引下一是又筒長りまは
案残増へ一廿三所も引下

一十六所の案積ハ五拾月ハケミ三拾月を
トムケミユカ位も引下一矢の筒方も増
およそ以釣合も不及き一筒の丈は
二尺前後の積り、那の遠所お伝ふまは
人の知る也

一拾月矢尺の事板羽ハ矢尺長案残より
およそハ鉄羽おとる半案一尺又ハ
一尺八寸の玉走おはハ矢尺二尺一寸位吉二尺
五寸の玉走おはハ矢尺二尺一寸五分より二寸
より一尺一寸五分四寸も右の矢尺も可
四尺より四尺案の玉走おはハ矢尺二寸五分
より二尺三寸五分より先所極る二尺五寸の
矢ハ誠におとる悪し一尺三寸もよく

係二三分の延縮、構もハ矢惣同方、前
も記通るし、製法も委敷記も通也
一五拾月矢尺一尺八寸又ハ八寸五分より一三寸
目矢尺一尺八寸ハ極るより一矢惣同方
製法も前も記通るし、板矢張上至り六

矢に誠を變て惡し二尺寸を以て

併三分の延縮構へた矢惣目方に

記通らし製法も委敷記を通也

一廿目矢尺一尺八寸又八寸五分より三十

目矢尺一尺八寸八分を以て矢惣目方

製法も記通し板矢張上至て六

寸敷也糊成りしついで張るし少

浮ちる板を張るしついで張るし少

流三編より上二編なきを以て

と云ふ事なり矢に鈔の清は

矢に變て不行矢の製法も大事に

政年中板羽矢修行し強よ四尺二寸五

分の百目筒より廿九町迄板羽を

鉄羽をも事なり矢に鈔の清は

一四方板附矢より力成附る事他流

なる事なり予まゝ一是は流用當

流秘中の秘也

一木口板の半遠所は是は流用

流秘中の秘也

流秘中の秘也

流秘中の秘也

流秘中の秘也

流秘中の秘也

流秘中の秘也

流秘中の秘也

遠野鉄羽棒火事

一先師板羽鉄羽火事百目廿四町五

寸目廿一町三寸目廿四町也如斯板

羽の製法も記通し板矢張上至て六

寸敷也糊成りしついで張るし少

浮ちる板を張るしついで張るし少

流三編より上二編なきを以て

と云ふ事なり矢に鈔の清は

我入狂ひなるは打下し落し解
多し打たききものし懸ゆるね根も亦
一し根の狂ひなきびの打根もは下
根も根の中なき根も亦成行打下
事し近路は是れ其にせん留す
是れもよし矢の目方も大槌板也
因し一尺の長根も方し亦も記通
崗の長根もよしかしののゆら
か能くも下し一節の通矢才
軒は鉛の鑄め成し矢も力成
附し一鉄羽板根り根の事し其根
記大槌板根通し可也

一薬の合し板根もかき半なる角
鏡の長短軽重も亦是れ也一
亦邊ゆは鉄板大遠所薬の合ハト六
ハト六也試し一尤鏡は四尺薬の
玉走の薬積し因成よし吟味
一薬持の所密固なる固成し
吟味し放つ事し所数は七セハ
所より三十町の薬法也三尺五寸
位の薬中を流ハトソよハトム位
三寸一尺二尺三寸四寸の薬中
秘法大遠所の薬は出たは五五
町行し薬の筋の板根も記通し
よし一板根も又其日の天氣の
曇晴雨中風烈もよし矢着大
甲乙の角板の追風も一權丸
向風も大也一時事秋もよし
春もよし三月末も至
連の暖氣暮もよし好大遠所秋
の末もよし取上も一太陽表
被り地火盛るなり薬の立至する
と一天氣快晴もよし薬乾も強
りね霧成し放し一薬の半
至るも一余り傳

の末多し其取上りて天陽表
被り地火盛るなり葉の立至るす
と一天氣快晴くく葉乾き強
りぬ霧散れけけ放り葉の半
至るむくく余口傳

雜木板羽火箭之夏

雜木板羽火箭之夏
淺木と照る檜木也其仰極るに雜
木が格所並後して一激鍊と傳
核木二十月十六町より十八町放得る
也廿月より核の事し矢判老葉付
成溝うく二第道より葉を女く
太くして根迄彫裏より核溝
成彫み幅三十月四より深く二分
半三分傳して一裏表二第彫
也廿月より核少く太くほくこ
板葉溝を合して代成して葉
成詰道成らぬ函より葉を女く
重くの大核より成り葉付共
於葉成用重葉核より一尤上り
り成り如く矢損一すく
る一矢の尾方羽中。松の溝根
も一鏽ぬすく一槍。密き木のま
赤く一其小葉ゆり葉を女く
周方程りぬ。核す矢物周八十月程
より核不行廿月も周方百三十月伝
那く一以強し溝一も周成附矢
よ力成附也葉込合五十月トケミ
二かより十六町又十八町トハトケミ又
トシよらより三十月トムケミカ
よりトケミ迄くすよ一尤葉法を
指す事もゆりその日の天氣よよ
臨機應變葉の差りゆり核く
一葉の立思を樹にゆり
損るもの也其日の傳那の檜百月是

よりトレケミ迄了るより一尤葉法を
指す事も所々その日の天氣より
臨機應変葉の差引ゆを試み知る
一葉の立悪を樹にゆるぎなく
損るもの也其日の運那り樽百月是
樽木廿所の矢月方より根より二百月葉
なくとも不行矢制を五十月通より葉溝
附より十四五ヶ年以前四尺葉の百月
筒より廿所放りききし樽は長筒吉
短より筒は矢を強く引くは矢損お
折る事もよくとも二十月引くは木の
左弦矢より樽内矢損ゆは筒長はれ
弦数多く矢肩より中へ返る事
筒二尺五寸より二尺七寸の筒より上
より一五拾月も同極あり一一百月
三尺七八寸四尺位の筒より可那り
百月廿所葉込合ルト上伝を試み
て氣を引く増減す一難あり
き本より樽内樽木がゆるぎなく
根は樽内竹根は用ゆ一葉は倍
一竹矢の事拾所は変り行也能ず
十二三町も行い少くは五町より
より一十四町迄放りききし尤三十月
也製は他は矢の長樽木三十月の尺吉
葉入寸三分中同寸葉寸は葉切
きより尤竹は元竹より小口は節は附
也中より節は吉根真細葉
切すは是より元竹より葉入中の
竹は節は移り三ヶ竹は小口迄通
根は厚みの竹より節を附真竹
より三ヶ竹は細葉一段葉附の細
葉葉入中の竹は釘は打りきき竹は
留る根も又釘をききさし木
は用ひはれり竹は造
一山口根も竹は葉より一葉込合

たはる竹細多一段葉附の細
板葉入羽中の竹を釘成打く是竹成
留る根も又釘をさしおる共一も木
成用ひはらひくく竹をさしおる造
一 一 小長も竹成多一 葉込各
十所二ヶ三十二三所ハケミ近し竹の
根もさし竹より生布悪葉口傳
一 生木枝成くそ俄火葉成半を
明も丁葉成催前日櫓の枝成すく
多竹成皮を去りけ水氣成
永根成成也一 似葉成附也
放時十二三町行きの両言七日
敷邊まで葉成けく不行か四日
制葉成す終り者合もあし葉成は
竹矢も云も一 さも成也

弦之事

一 遠所の弦は葉強か免角損一安
一 弦換多時矢引は大事也成
一 程よも木成用由一 矢木もも
弦の亦大事に挽割の木用ひぬ事し
割木成用由一 近以又元弦附板
二三枚も附也二の弦も同板一二枚も附
ふし三の弦も一枚附也板又濃紙の
四五編も張る能く撥成さひく張る
長筒弦の敷多一 別く元弦二の弦は
厳一 損角一 一の弦遠流葉が
張るし竹成門へ末の弦中も張るの
何と替る事か一 張上て流二三編引
てよ一 如城すも損る事先也一 筒
も那れ鈍き紙より仁も何れも
一 身も指も鈍る事也一 靴
も損るも張るも痛く一 予
遠所の弦はくく張る弦成用ひ葉
あらし半なり一 切弦の寸五寸前後吉
先脚云二寸を延ひ四寸よりち
先脚云二寸を延ひ四寸よりち
事何事しとさしてかき事那一 只お
合はれ大支成る一 雜木の弦成程

遠町の弦はくく張弦は用ひ業
あし半なり切弦の寸五寸並後吉
之所云寸五寸延ひ四寸よりち
免るしゆまじし品も中て延縮弦
事阿まじしものさしてわくる半那一只
合つや大夏はくく雑木の弦成程
固方なり標成用由一弦力造れ
矢負る故なり業口傳

掛之大夏

一鹿皮の三日月用半時節夏秋の皮
よき也春冬は皮能く制衣宜大鹿皮
よあし標業大よまじし夏秋の皮成
用半し和かくして力も皮成はし
とわわくくまのくく力なき百月よ
よ後しわくく業勢厳りれ大よ換
焼く半阿る三日月二十月よわくく
皮成用半百月廿月よ力那くく
業おくく一宮上の皮成吟味すく半
也板割る一板百月鹿皮成一寸五分
角も切て幾枚も粘一糊成附て重
一寸五分押く一寸位よあし然と
も大遠町押一寸五分位よ一廿月
三日月よ日依棠丸よ合せも少一大き
く切百月の通重半一寸位押七
八分よ一是も大遠町押一寸位
一切板至く大半し是丸よ切半
也飯櫃形よ丸火の留悪一是丸
よ切一切虫一のわくぬもあなれ大半
又物成くく研く真丸よ切く一生
皮よ好まぬ枯る皮よ一板棠入の二合
大夏也二合よき悪一又和くあし悪
一中庸成用ゆ一遠町の大半
よ火とまじ能く心成用ゆく半
あり業口傳

仕掛之事

一仕掛向土儀成積又小箇成用ゆ
実留田の向土儀也此も儀也悪一
矢のむれ弓の矢もくく左右あれ
よあし実成文まじし箇成

あり奉り口傳
~~一 柳葉の湖に舟を載せしむるは~~
~~早也昔は舟を乗しし村々遠く舟~~
~~半し舟を載しし舟も半し也~~

仕掛之事

一 仕掛向土俵に積又小筒に砂紙用ゆ
突留の土俵也此土俵也思
矢のしるしの矢を引く
左右に引
引るは突留紙を支す
引るは
留る思
銃和
よ一土俵に突留の流のさす
よ一土俵に突留の流のさす
よ一土俵に突留の流のさす
矢勢おとす心なす人多
引る
銃は和
十
矢能行し銃は是の事也筒の動
ふ無双なき銃は
短筒
別く和
筒に在ひ出来る也銃の花ひ矢は
柄は矢柄まじりしは仕掛
の大事也能くは銃は入る
案口傳

巢中八寸百月火矢之度

一 百月巢中一尺三寸六分火矢二枚
一 月當りて銃は二所紙放りし
一 枝は所月を南に至る矢尺一尺七寸
五分巢入四寸羽中四寸根二寸二分右
の寸尺一可也弦は五寸紙二本
二寸五分也薬込合ストしよりスト
メより掛八分一寸よ
巢中よ
存外は行ふし文化十三年八月
十五日是紙放りし記置也

一 管中八寸の百月多年銃鍛練

一 十八所 数度放得も也
十八所紙放りし
今も放りし
十九
所紙放りし
今も放りし
至る難
十八所
今も放りし
他一尺八寸弦一寸五分よ
矢月
百六七十月よ
百五十月よ
今も放りし
尚も
隨分
用ゆ
矢巢入四寸三分羽中四寸根二寸
五分也羽は三十月五十月の皆も

至く難く十八所開射し矢の製
他一尺八寸弦一寸五分より一尺寸五分
百六七十寸より一尺寸五分より未だれを
尚くより一隨分難く亦或用ゆへ
矢巢入四寸三分羽中寸根二寸
五分也羽三寸五分十寸の者より
尤トヒ六分位より一矢製並
去の通り矢射し密く仕立也掛
ハカクともよ一葉ニストハケミストし
チクシ其奈ゆへも不行尤所敷
十八所也其奈ゆへも矢損多し
却てゆへ板羽も十六所より軽く
着きも也板羽亦地一用ゆへ火
射る所是非一二編しよ一葉
ストユト十六所行也短筒銃
力ぬ一仍く放出一は筒在
也筒の柱い矢も移りも安
まきも或れもよす一摺草
よし

銃之変

一大銃先師のい通天地六の敷
成りし共六寸五分大銃の始と
何れ三十寸以上二百目三百目
行す半也中庸も二百目止
業成試す中庸も二百目止
西三年の者二百目巢中四尺五分
銃成り火並成試す大抵二百
目後のも成り三十所門入のもの
後行す徳も難し二七八所
はすや二百目より七寸五分
す文化土甲亥年土月四日予右の二
百箇なる三十所用者も一
放門人松下某一枝成り門初矢
松下六九所に至る予後放三十一所
四十間成放得る門人一統感賞
一並代未聞とみ別門人下場
矢落の印成建後世も
愚業すも二百目の業も聊勝
慶ゆへかく事三百目二百目
聊業猶もへよ併三百目五百目

四十間放得きり門人一統感賞
一並代未聞と云ふ別門人下場
矢落の印残建後世のやむを
愚業すま百月の業と聊勝不
慶ゆかしく建三百月二百月
聊業猶もへふ併三百月五百月
もも至りたる矢の姿悪しく以て
矢制衣と粉骨すくも中々所を矢
出来さかす一火矢の大業百月
百十月二百月迄ある一板大筒
尺寸の半前も記一きれも
尚委再の記大筒可也業す
鑄筒業鈍一且ゆけ安ん徳
淡筒猶も一六業残願百月尺
寸三尺六七寸の處に上れる一四尺
も至ま弦敷道く業おとす何
へ一玉走三尺六七寸子三寸又罽
位惣長四尺佐流圓方十八九貫より
二三貫位迄も一業持も四寸一
二分向も掛子三寸位の誠誠
術者へ一業と業持別も厚く堅
固もも射筒も支なりといも
銃の釣合悪し一釣合悪し徳も
自然と業よわく元角筒の釣合
能所残用ゆ一二百月玉走四尺四
五寸迄も一元祖大野も同
の心人面のも一同寸同月同尺
の銃中りも心も遠くも一遠く筒
も遠く所なり同業用残建放も
事也と云ふ一の語あり誠も
かり予以法残も一多年試
大野中一遠くも感んせり火
術の業他家なり招うれ所望
遠く業も河也ゆも流も合
試の火矢二三枝放く存月書中
建清野残放一砲術家の心
も一板五十月尺寸三尺の玉走
上る一二十月筒も二尺六七寸の玉
走の上を流一以て流る業中疾

遊子半...の流...

試の火矢二三枝放く存月常中

建清野放...一 砲術家の心ね

...一 板舟十目尺寸三尺の玉芝

...一 三十目筒も二尺六七寸の玉

...一 能木の筒は中...疾

...一 業お...一 菓中毎

...一 作傳

...一 二尺五寸尺

...一 所筒と定矢も同寸

...一 不行馬

...一 知

...一 矢尺寸

...一 定銃長

...一 思案

...一 百目

...一 二尺三

...一 寸

...一 尺

...一 六

...一 七

...一 寸

...一 吉

...一 前

...一 七

...一 寸

...一 長

...一 短

...一 一

...一 尺

...一 二

...一 三

...一 寸

...一 四

一

木

の

類

は

数

多

ゆ

り

中

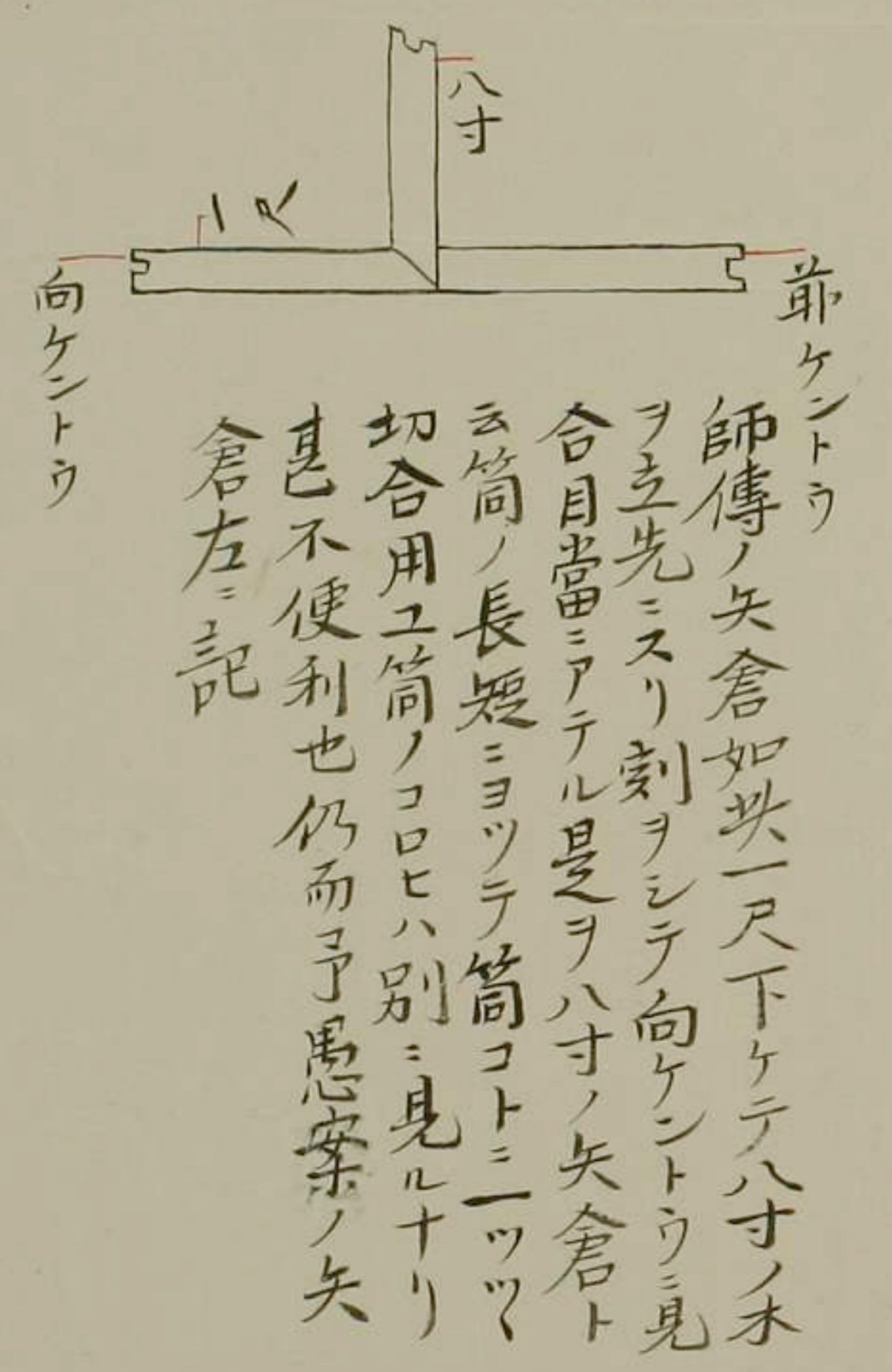
就

伐さるゝ相傳す半古き

一本の半樫の類は数多ゆり中乾煎樫
伐さるゝ能木の圓樫申すをよ
水邊或肥地よか生さる木は和
々々圓蒸ふ也瘦地石地日向をり
生し木より赤樫もよ一保赤樫
の真甚わつぱ一皮舟の方より
免角木の圓樫よりて圓方を本
吉白樫も生地より圓も生さる
圓方もゆき角より一板切枯す半四
五半をよ一色子枯かきよもの那り
平火伐焚りよ揚々煙のわらば
一枯す一雨ふぬなわらば
おけ圓軽くゆきわらば
切し十々半近の木より一余枯造れ
又木の性移けゆきわらば
半ゆきよ半の木の伐用ゆき
一枯す一皮舟の伐用ゆき一小町
真伐用ゆき一大町よ本伐吟味
皮舟の方伐用ゆき一大町伐放ん
ゆき一兩三年も前よ心ゆき本伐
吟味一又剥皮おし吟味す一調
ゆき一催ゆき一俄よ大町伐
半ゆき一ゆき変々成就せよ
心ゆき半那ま

一藥法種ゆり傳來の二法より
ゆき一尚口傳阿里

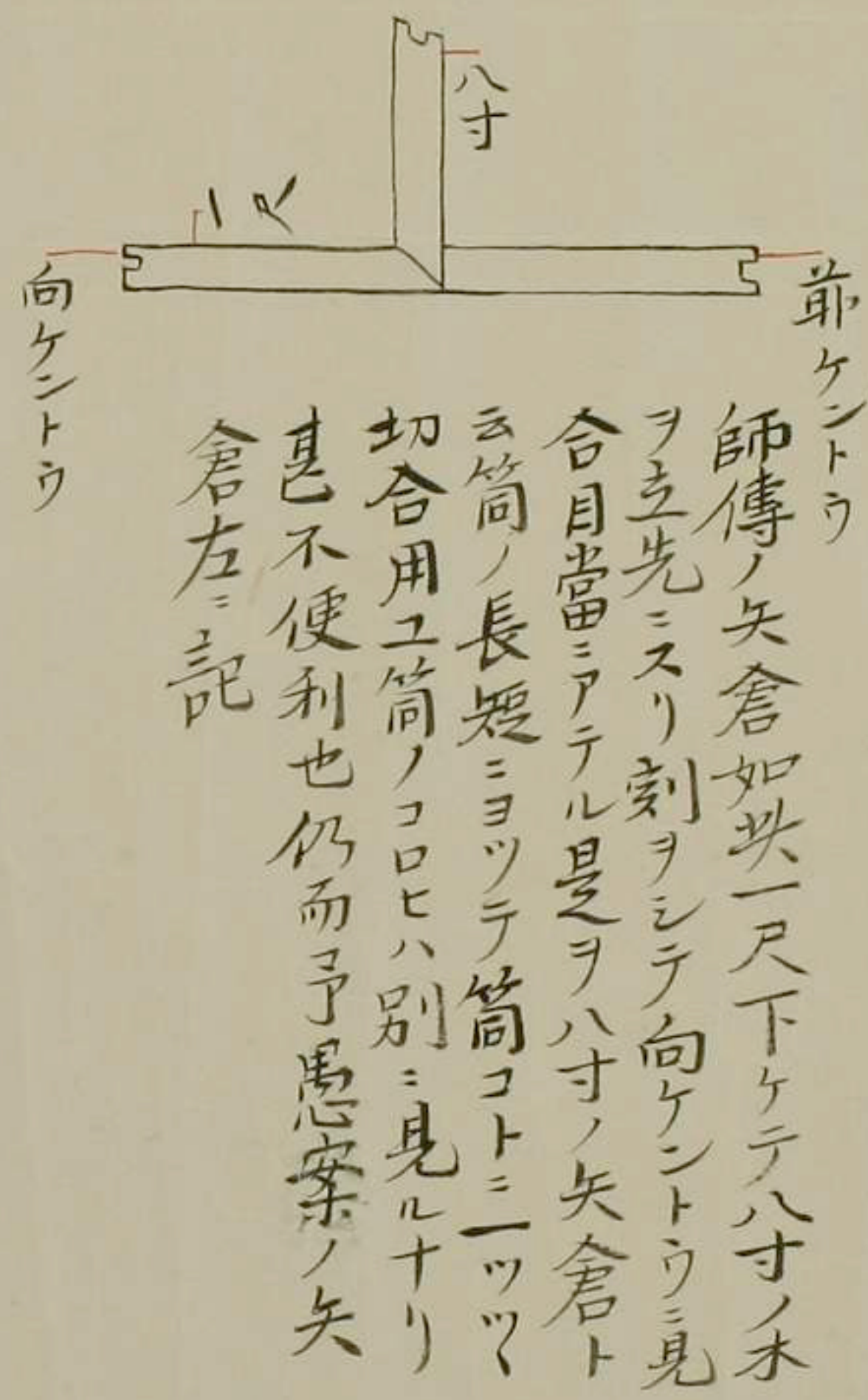
矢倉之夏



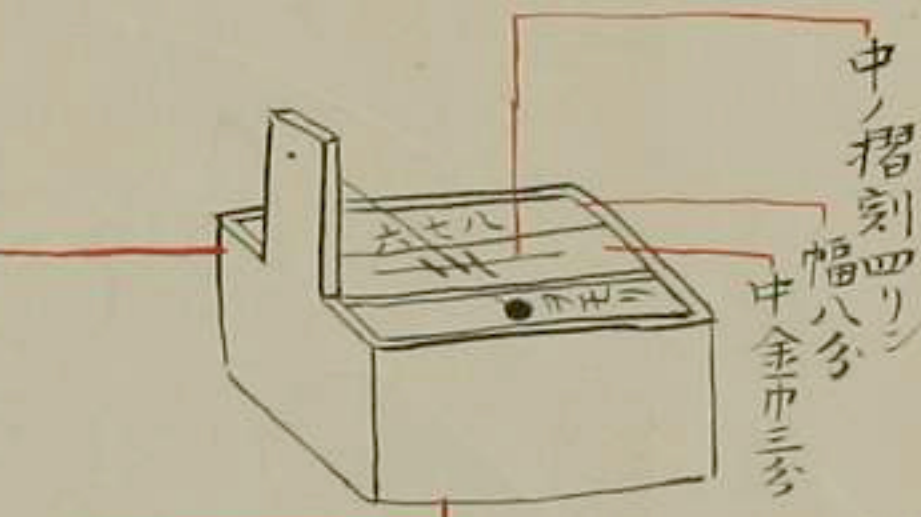
師傳ノ矢倉如共一尺下ケテ八寸ノ木
ヲ立先ニスリ刻ヲシテ向ケントウニ見
合目當ニアテル是ヲ八寸ノ矢倉ト
云筒ノ長短ニヨツテ筒コトニツツ
切合用ニ筒ノコロヒハ別ニ見ルナリ
甚不便利也仍而予愚案ノ矢
倉左ニ記

心づつて事那も
一薬法種々の傳來の二法より
尚口傳阿里

矢倉之夏



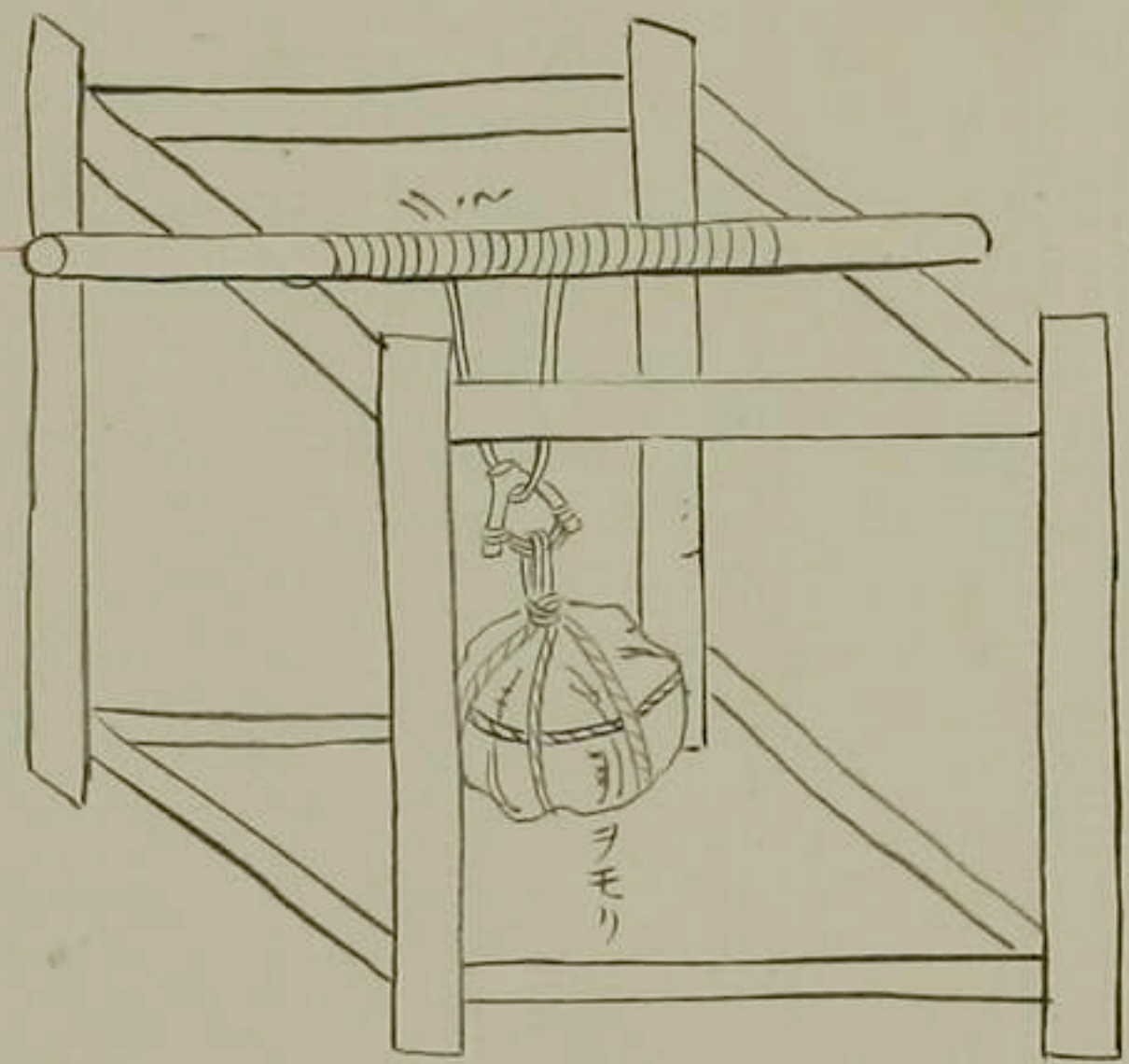
師傳ノ矢倉如以一尺下ケテ八寸ノ木ヲ立先ニスリ刻ヲシテ向ケントウニ見合目當ニアテル是ヲ八寸ノ矢倉ト云筒ノ長短ニヨツテ筒コトニツツ切合用ノ筒ノコロヒハ別ニ見ルナリ甚不便利也仍而予愚案ノ矢倉左ニ記



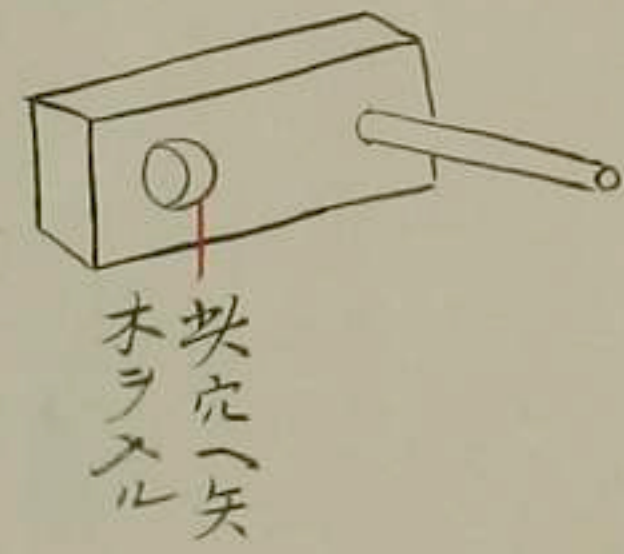
如斯矢倉予始テ制衣筒ノコロヒ兩用ニテ甚便利也當時是ヲ用ユ七寸八寸九寸ノ矢倉ニテ試ルニ差テ替ルコトナシ是ヲクワユト云然リトイユトモ八寸ノ矢倉ニシクワナシ尚後人可考
長ケ一寸三寸

右ノ矢倉筒ノ長短ニカワラス前ケントウノ先ニセ見ル也

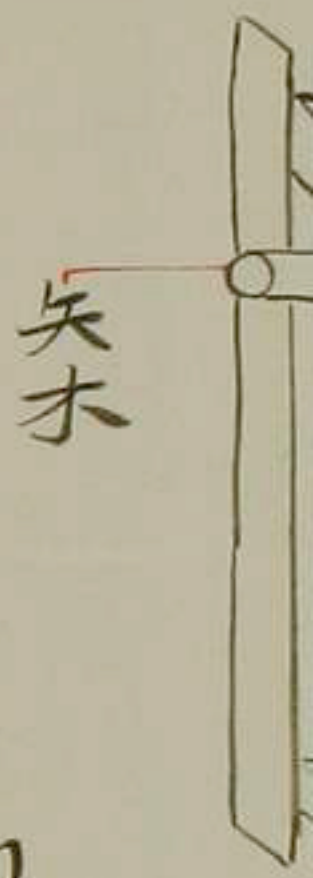
藥附且室之圖



愚案ニテ如以臺ニテ藥ヲ附ル也ヲモハ三四貫目ノヲモリヲ用ユ百目遠丁ノ矢ナレハ七八十編卷カエシシメル也五十目三十目ハ四五十ハニテモ

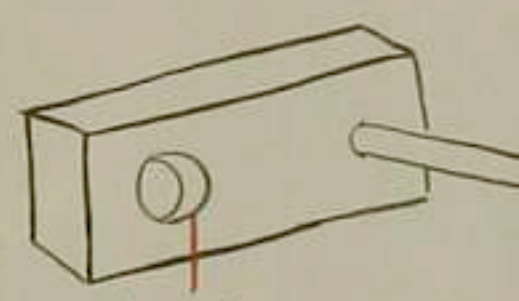


百目羽形



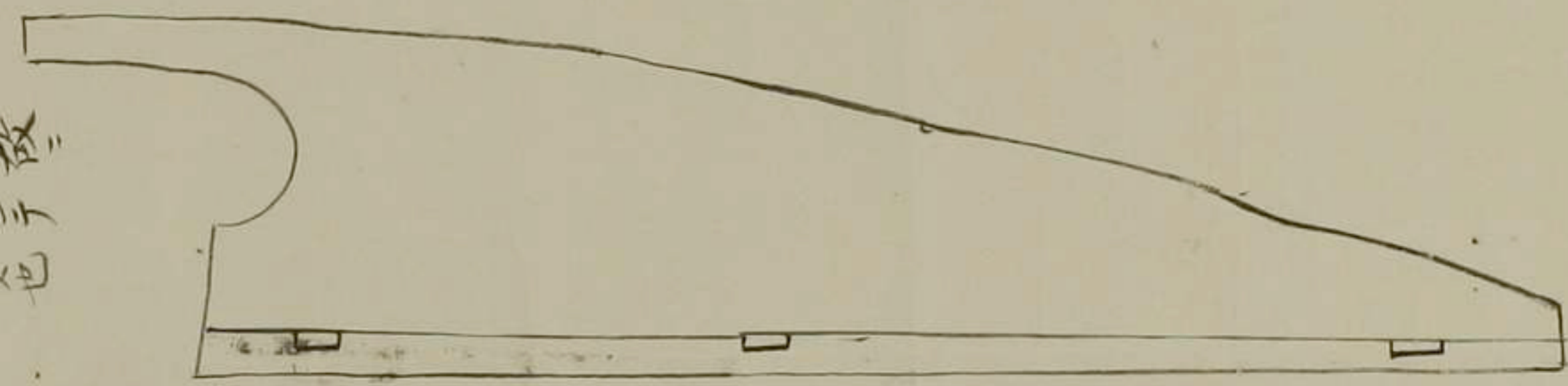
矢木

廻木圖



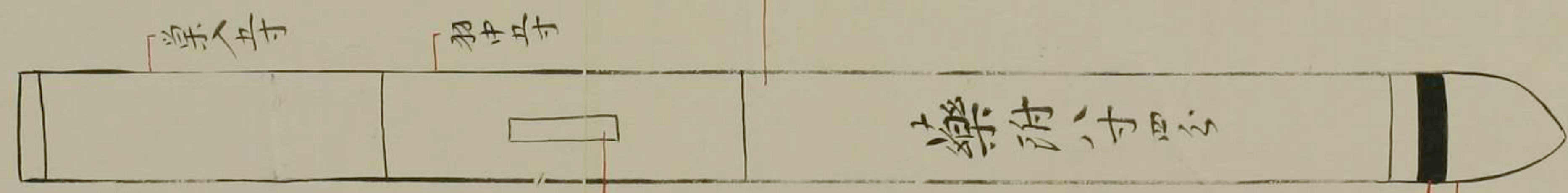
穴ハ矢
木ヲ入ル

百目羽形



羽下目ハ折シ居ニ故ニ
近頃只五身等第ニテ
一寸キアニシテ切落色
味古也

羽形ハ如吹ナルヲ用ユヘシ
キタイ鉄ニシテ隨分薄
キ羽ヲ古トス
五寸目三十目是ニ習フテ用
ユヘシ



樂射

根ニ寸五分又ニ
三寸

鑄込巾五分余
深ニ三分余一段
切ラトシ鉦留ヲ
スヘシ若管ノ方
重ケレハ巾六分
ニモスヘシ

坎所ニ如吹鉦鑄
込ラスル也尤羽ノ
間ニ方巾三分半
位深ニ二分半ヨ
リ三分長テ寸
四五分

板羽もハ折シ
五寸目三十目是
又矢の力の分極バ
ハ折ルヲ難也
也

一當流者遠町火箭前專外仕掛物
相圖之矢玉之早放矢之早打相圖之

一當流者遠而火箭專外仕掛物
相圖之火王之早放矢之早打相圖之
早放炮礮之類火術之次第者別卷
而令相傳事如斯業為傳受直
成就遠而火矢之業者切磋琢磨
後得之故其業甚難成仍而當
流之真儀定

右天卷二卷者予年來粉骨鍛
鍊而所覺知大成流之秘書
也是以深韞匱而藏諸近來
門人懇望不少然非其人則不
敢以許矣今并崎某執昔古越他
執心尤渥予感悅之餘雖珍藏
書叩兩端而謁焉誓不啻他
門雖同門親子勿妄視尔

加藤主稅之助

熙仙

足立權兵衛

文化十五戊寅年

正月



敢以許矣今井崎某執昔古越他
執心尤渥予感悅之餘雖珍藏
書叩兩端而謁焉誓不啻他
門雖同門親子勿妄視尔

加藤主税之助

熙仙

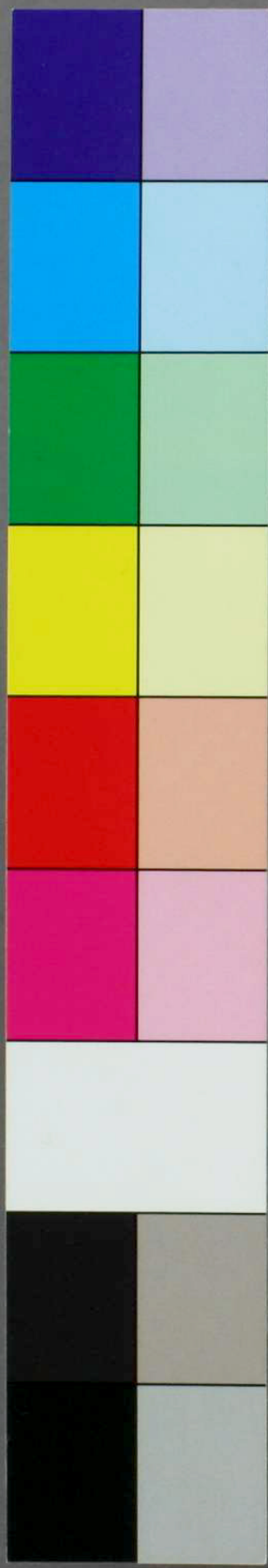
足立權兵衛

文化十五戊寅年

正月



井崎小藤太殿



特別
ケ5
1030